

# 佐倉印西線（地方道路交付金） 埋蔵文化財調査報告書 3

- 本塙村竜腹寺 1号墳 -

平成18年3月

千葉県県土整備部  
財団法人 千葉県教育振興財団

# 佐倉印西線（地方道路交付金） 埋蔵文化財調査報告書 3

もと の むらりゅうふく じ いちごうふん  
- 本塙村竜腹寺 1号墳 -



## 序 文

財団法人千葉県教育振興財団（財団法人千葉県文化財センターから平成17年9月1日付で名称変更）は、埋蔵文化財の調査研究、文化財保護思想の涵養と普及などを主な目的として昭和49年に設立され、以来、数多くの遺跡の発掘調査を実施し、その成果として多数の発掘調査報告書を刊行してきました。

このたび、千葉県教育振興財団調査報告第550集として、千葉県県土整備部の佐倉印西線（地方道路交付金）事業に伴って実施した本埜村竜腹寺1号墳の発掘調査報告書を刊行する運びとなりました。

この調査では、塚1基及び関連する遺構・遺物が見つかり、この地域の歴史を知る上で貴重な成果が得られております。

刊行に当たり、この報告書が学術資料として、また、地域の歴史資料として広く活用されることを願っております。

終わりに、調査に際し御指導、御協力をいただきました地元の方々を始めとする関係の皆様や関係機関、また、発掘から整理まで御苦労をおかけした調査補助員の皆様に心から感謝の意を表します。

平成18年3月

財団法人 千葉県教育振興財団

理事長 佐藤 健太郎

## 凡　　例

- 1 本書は、千葉県県土整備部による佐倉印西線（地方道路交付金）事業に伴う埋蔵文化財の発掘調査報告書である。
- 2 本書に収録した遺跡は、印旛郡本埜村竜腹寺字メ掛464-1所在の竜腹寺1号墳（遺跡コード328-005）である。
- 3 発掘調査から報告書作成に至る業務は、千葉県県土整備部の委託を受け、財団法人千葉県文化財センター（平成17年9月1日付で財団法人千葉県教育振興財團と名称変更）が実施した。
- 4 発掘調査及び整理作業の組織、担当者及び実施期間は、第1章に記載した。
- 5 本書の執筆及び編集は、上席研究員 渡邊高弘が行った。
- 6 発掘調査から報告書の刊行に至るまで、千葉県教育庁教育振興部文化財課、千葉県印旛地域整備センター、本埜村教育委員会、五十嵐行男氏の御指導、御協力を得た。
- 7 本書で使用した地形図は、下記のとおりである。  
第1図 本埜村役場発行 1/2,500本埜村都市計画図9  
第2図 本埜村役場発行 1/25,000本埜村全図
- 8 本書で使用した図面の方位は、旧公共座標の日本測地系（国家标准直角座標第IX系）における座標北である。

## 本文目次

第1章 はじめに	1
第1節 調査の経緯	1
第2節 調査の概要	1
第3節 遺跡の位置と環境	1
第2章 遺構と遺物	5
第1節 竜腹寺1号墳	5
第2節 土坑・溝	5
第3節 出土遺物	8
第4節 石造物	9
第3章 まとめ	11

## 挿図目次

第1図 遺跡周辺地形図	2
第2図 遺跡の位置と周辺の遺跡・史跡	3
第3図 竜腹寺1号墳、上層遺構・下層確認グリッド配置、土層断面	4
第4図 調査区西側検出遺構	6
第5図 調査区東側検出遺構	7
第6図 出土遺物	9

## 図版目次

図版1	竜腹寺1号墳（南西から）、竜腹寺1号墳（北西から）、竜腹寺1号墳（北東から）
図版2	調査区全景（南西から）、下層確認グリッド土層断面、竜腹寺1号墳土層断面
図版3	S K001, S K002, S K003
図版4	S K004, S K005, S K006
図版5	S D001, 石造物①, 石造物（右から②, ③, ④, ⑤）
図版6	出土遺物（土器・陶磁器、錢貨）

# 第1章 はじめに

## 第1節 調査の経緯

千葉県県土整備部は、印旛郡本埜村竜腹寺字メ掛464-1において県道佐倉印西線の歩道拡幅工事を計画し、千葉県教育委員会に照会したところ、千葉県教育庁教育振興部文化財課は、事業範囲が周知の埋蔵文化財包蔵地である竜腹寺1号墳の一部に含まれる旨回答した。この埋蔵文化財の取扱いについて文化財課との協議の結果、記録保存の措置を講ずることとなり、財団法人千葉県教育振興財団が発掘調査を実施することになった。

発掘調査及び整理作業に係わる各年度の組織、担当職員及び作業内容は、下記のとおりである。

### 平成16年度

期 間 平成16年10月1日～平成16年10月29日  
組 織 北部調査事務所長 古内 茂、上席研究員 岸本弘三  
内 容 発掘調査 上層本調査68m<sup>2</sup>、下層確認調査2m<sup>2</sup>

### 平成17年度

期 間 平成17年10月3日～平成17年10月31日  
組 織 北部調査事務所長 古内 茂、上席研究員 渡邊高弘  
内 容 整理作業 水洗・注記から報告書刊行

## 第2節 調査の概要

上層は、調査区が墳丘の裾部にあたるため確認調査は行わず、全面表土を除去した後に遺構の調査を行った。下層については、グリッドを1か所設定して確認調査を行った。その結果、上層は近世以降の土坑6基、溝1条が検出され、古墳に伴う周溝等の施設は検出されなかったため、竜腹寺1号墳は周知されていた古墳ではなく、塚であるとの結論を得た。下層は遺物が出土しなかったため、上層のみ本調査を実施した。

なお、調査対象地が幅約4.2m、長さ約30mと細長いことから、方眼グリッドは設定せず、調査区内及び塚盛土上の任意の位置に公共座標に則った基準点を打設し、遺構実測等に使用した。なお、竜腹寺1号墳については20cmセンターで全体の平面図を作成した。

## 第3節 遺跡の位置と環境（第1・2図）

竜腹寺1号墳は下総台地の北部に位置し、北印旛沼に西側から流入する小支谷によって周囲を樹枝状に開析された台地上に立地する。台地の北西側には、手賀沼水系の亀成川の最奥部が迫っており、分水嶺にあたる地域である。周辺の標高は26m前後である。南側は谷に接しているため、南西側に向かってやや傾斜している。

竜腹寺1号墳（1）は過去に発掘調査歴がなく、千葉県埋蔵文化財分布地図には、種別として「古墳、塚」、遺構・遺物等として「円墳、縄文土器、土師器、鉄器」と登載されている。また、本遺跡の直線距



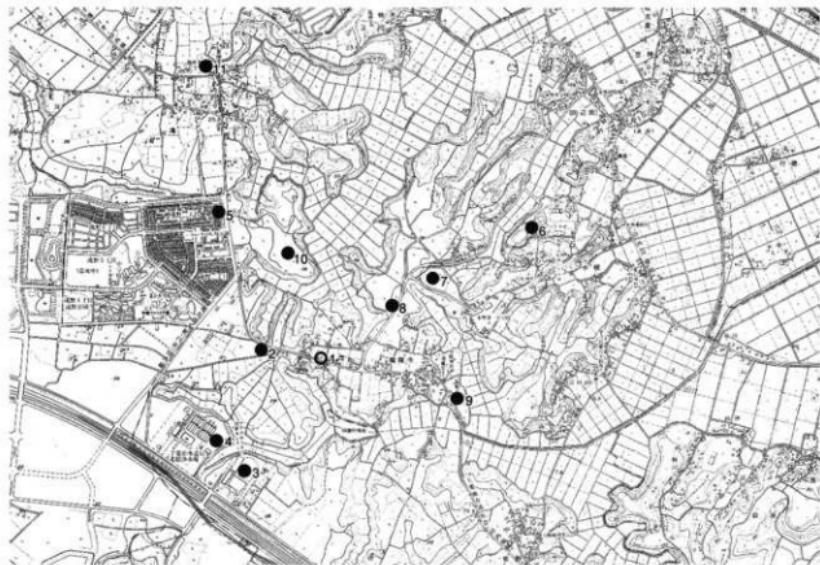
第1図 遺跡周辺地形図 (1/2,500)

離で約350m東側には竜腹寺2号墳（2）が位置しており、分布地図には「円形墳3基のうち1基（16m）が古墳か」との記載がある<sup>1)</sup>。

周辺の主な発掘調査例としては、本遺跡の西方域では千葉ニュータウン関連に伴う調査が大半を占めている。五斗蔵遺跡（3）では、旧石器時代のⅢ～Ⅴ層にかけてのブロックが22か所検出され、ナイフ形石器等800点を越える石器が出土した。縄文時代では、早期茅山上層式期を中心とした炉穴が67基検出された<sup>2)</sup>。向原遺跡（4）からは、旧石器時代のⅢ～Ⅳ層の尖頭器、細石刃、細石刃石核等が出土している<sup>3)</sup>。大門遺跡（5）では、方形5基、円形1基の塚が調査されている<sup>4)</sup>。

本遺跡の西方域では、北印旛沼を臨む台地上に立地する宮内遺跡（6）が唯一の大規模な調査例として挙げられる。旧石器時代から中世に至る複合遺跡で、弥生時代後期から奈良平安時代までの各時代の住居跡が合計125軒、奈良・平安時代の掘立柱建物跡が20棟検出されており、当地域における該期の集落跡としては希少な調査例である。中・近世の遺構は、墓坑群とそれに関連する地下式坑が検出されている<sup>5)</sup>。宮内遺跡の西側の谷を挟んだ対岸に位置する天王前遺跡（7）では、弥生時代後期等の住居跡、円墳2基、中・近世の土坑群等が検出されている<sup>6・7)</sup>。天王前遺跡から県道佐倉印西線に至る町道沿いには、計13基で構成される竜腹寺古墳群（8）が所在しており、そのうちの1基は調査の結果、円形の塚であるとの結論が得られ、竜腹寺1号塚と命名されている<sup>8)</sup>。

遺跡周辺の史跡としては、大同2年（807）の創建伝えられる竜腹寺（9）がある。現在の寺域は、永正4年（1507）の戦乱による火災により、天文19年（1550）に竜腹寺跡（10）から移したものとされて

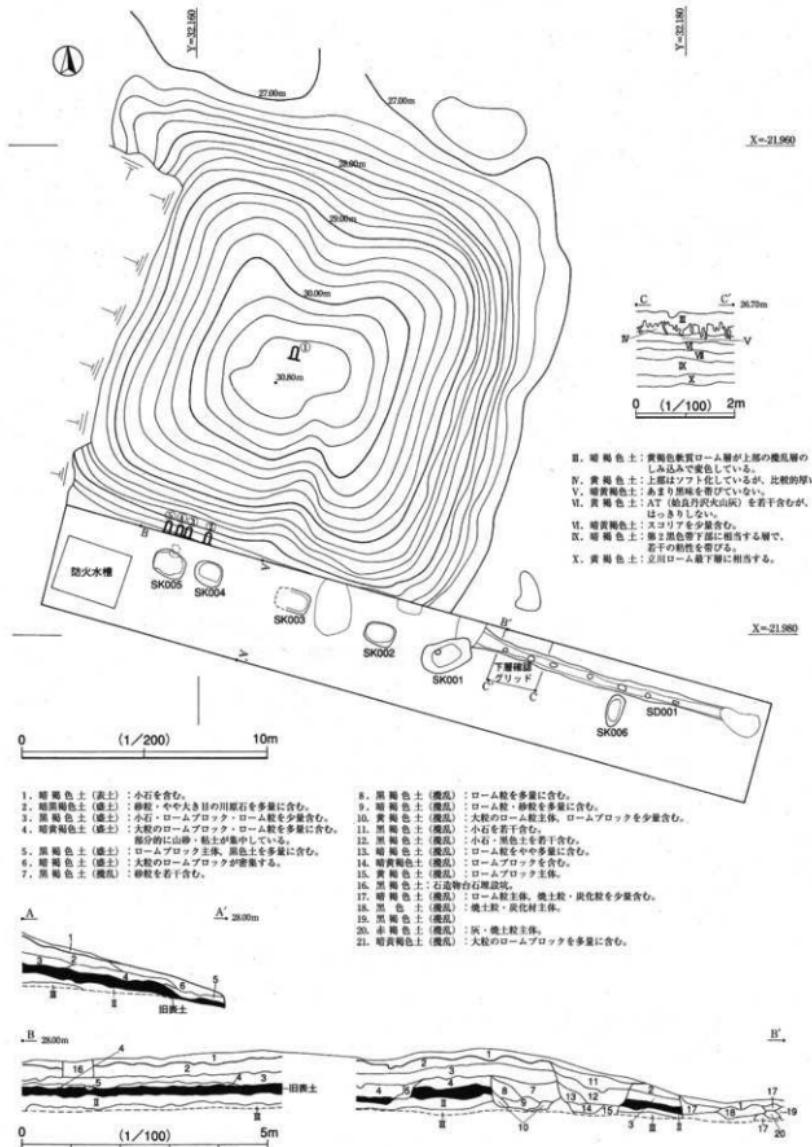


1 竜腹寺1号墳 2 竜腹寺2号墳 3 五斗町遺跡 4 向原遺跡 5 大門遺跡  
6 宮内遺跡 7 天王前遺跡 8 竜腹寺古墳群 9 竜腹寺 10 竜腹寺跡 11 竜水寺

第2図 遺跡の位置と周辺の遺跡・史跡 (1/25,000)

いる。<sup>9)</sup> 境内からは870点余の板碑等が発掘調査されており、そのうち記年銘を有する武藏型板碑66枚は、元応3年（1319）から享禄4年（1531）年に及ぶものであり、南北朝期の作と推定される梵鐘の年代観と一致するものである<sup>10)</sup>。竜水寺（11）は、竜腹寺と同年代の大同年間（806～810）の創建と伝えられており、建武5年（1338）の銘文を有する梵鐘、室町期の作と推定される金剛力士立像が現存する。

- 注1 『千葉県埋蔵文化財分布地図（1）－東葛飾・印旛地区（改定版）－』千葉県教育委員会 1997  
 2 『千葉北部地区新市街地造成整備事業関連埋蔵文化財調査報告書Ⅰ』財團法人千葉県文化財センター 1993  
 3 『千葉ニュータウン埋蔵文化財調査報告書Ⅱ』千葉県都市公社 1974  
 4 前掲3  
 5 『宮内遺跡発掘調査報告書』財團法人印旛都市文化財センター 1994  
 6 『龍腹寺1号塚・天王前遺跡』財團法人印旛都市文化財センター 1991  
 7 『天王前遺跡（第2次）』財團法人印旛都市文化財センター 1999  
 8 前掲6  
 9 前掲3  
 10 『印旛郡本埜村竜腹寺境内埋没板碑発掘調査報告』竜腹寺境内埋没板碑発掘調査団 1973



第3図 竜腹寺1号墳、上層構造・下層確認グリッド配置、土層断面

## 第2章 遺構と遺物

### 第1節 竜腹寺1号墳（第3図、図版1・2）

竜腹寺1号墳は、現況では東側の裾部が削平されているが、北西側のコーナーは削平を受けていないと考えられる。今回調査対象となった南西側の裾部は県道に接していた。平面形は、南北方向が約22.0m、東西方向が約20.5mの方形で、高さは約3.8mである。佐倉印西線に沿うようなかたちで構築されており、長軸方向はN-20°-Eである。頂部に1基、南西側の裾部に4基の石造物が立てられていた。これらの石造物については第4節において述べる。

墳丘盛土断面の観察によれば、谷に面する南側及び南東側は旧表土層が下方に傾斜して堆積しており、盛土下の旧地形は周囲より高まりを有していたことが判明し、特に整地は行わず、ローム主体の土（4層）、黒褐色土主体の土（3層）、川原石を多量に含む暗黒褐色土（2層）を概ね平均に盛土し、裾部にはロームブロックを含む暗褐色土を積み上げて構築している。盛土のうち、3・4層は堅さが認められたが、そのほかは軟弱な土層である。旧表土からの盛土の高さは、塚の裾部を東西方向に断ち切った土層断面B-B'では約40~60cm、南北方向に切った土層断面A-A'では約20~50cmであった。なお、土層断面にはいくつかの擾乱坑が確認されたが、7~10層が堆積する擾乱坑は3層の盛土下から掘り込まれており、ある時期に修築がなされたことを示している。なお、16層が堆積する断面方形の穴は、石造物の台石の埋設坑であり、長方形に加工された石が計8個、上下2段、左右3列に置かれており、おそらく本来は、②～⑤のいずれかの石造物に伴うものと考えられる。

調査区内からは主体部、周溝等の施設は検出されず、出土した遺物も中・近世以降のものがほとんどであるため、古墳ではなく塚と判断される。

### 第2節 土坑・溝

調査区内から検出された遺構は、土坑6基、溝1条である。土坑のうちSK001とSK006を除いた4基は塚の盛土下から検出され、塚の南西側の裾部に沿ったような形で検出された。以下、調査区の西側から東側に順を追って記述する。

#### SK005（第4図、図版4）

調査区の西側、塚裾部の石造物群の50cm手前に位置する。長軸径1.33m、短軸径1.1mの楕円形を呈する。短軸径線の方位はN-20°-Eで、塚同一方向に向いている。底面はほぼ平坦で、深さは約50cmである。北壁中央下には、底面から斜め下方に径約40cm、奥行き約45cm円形のピット状に掘り込まれている。南西側コーナーはオーバーハングしている。覆土は、ローム粒・ロームブロック・砂粒を混入する黒色土が主体で、あまり締まりはなかった。遺物は出土しなかった。

#### SK004（第4図、図版4）

SK005の35cm南東側に隣接して位置する。長軸径1.17m、短軸径1.0mの楕円形を呈する。短軸径線の方位は塚及びSK005と同じN-20°-Eである。西壁は斜めに立ち上がる。底面はほぼ平坦で、東壁付近は若干窪む。深さは最深で40cmである。覆土は、ローム粒・ロームブロック・砂粒を含む暗褐色土が主

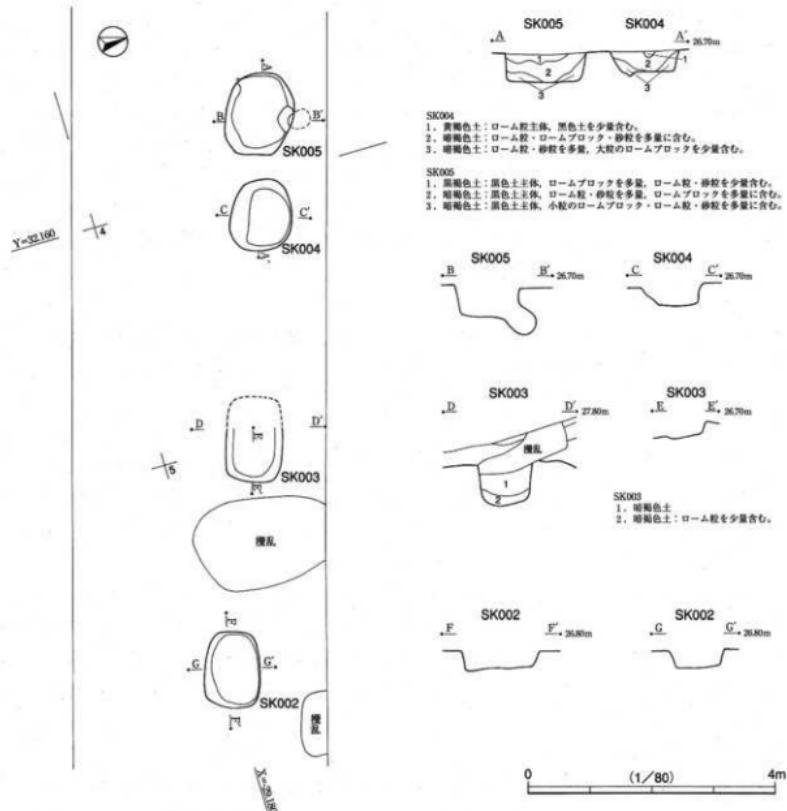
体で、あまり縮まりはなかった。遺物は出土しなかった。

S K003 (第4図、図版3)

S K004の約2.4m南東側に位置する。北西側は電柱の支柱が埋設されていたため、調査することができなかった。平面形は東西方向に長軸を有する隅丸長方形と推測される。短軸91cmを測る。短軸方位はN-18°-Eである。底面は中央付近が最も深くなっている。最深で70cmである。覆土は暗褐色土が主体である。遺物は出土しなかった。

S K002 (第4図、図版3)

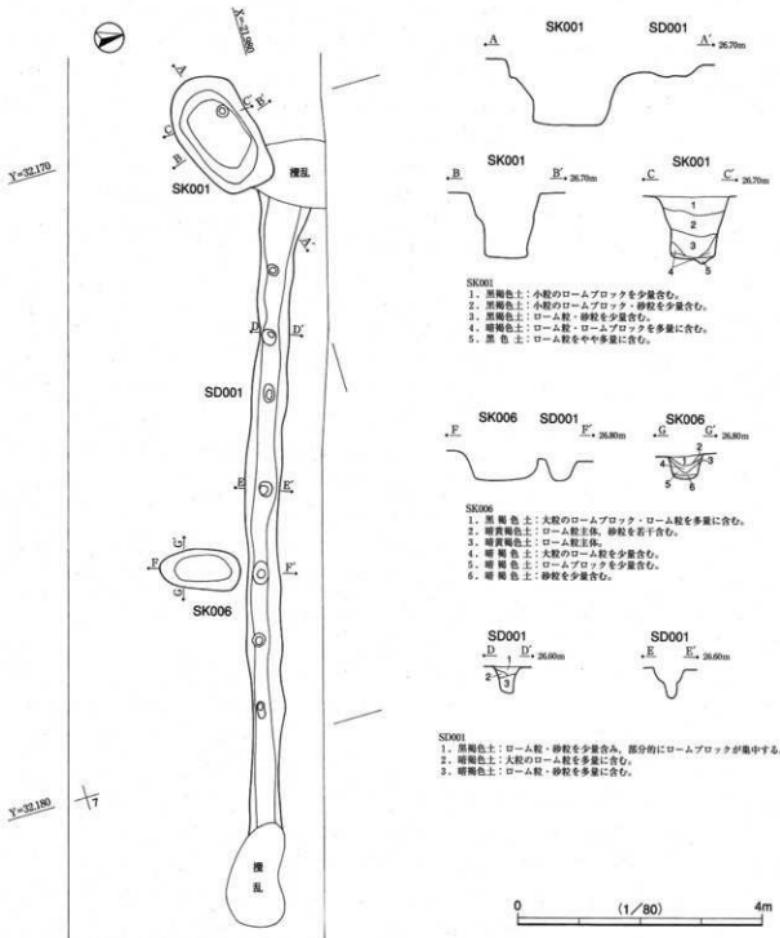
S K003の約2.45m南東側に位置する。長軸1.24m、短軸90cmの隅丸長方形を呈する。短軸方位はN-20°-Eである。底面は南西側が下方に傾斜している。深さは最深で35cmである。覆土は記録を欠くため不明である。遺物は出土しなかった。



第4図 調査区西側検出遺構

SK001 (第5図、図版3)

SK002の約1.3m南東側、塚の盛土外の南東側コーナー付近に位置する。北東コーナー側は攪乱されている。長軸径2.06m、短軸径1.23mの楕円形を呈する。短軸方位はN-20°-Wである。壁は深さ約50~70cmまでは外傾しながら立ち上がり、それより下方は、ほぼ垂直に立ち上がる。底面は平坦である。深



第5図 調査区東側検出造構

さは最深で1.05mを測る。北西側コーナー付近の底面に径約20cm、深さ約10cmを測る円形のピット状の掘り込みがある。覆土は、1・2層はあまり締まりのない黒褐色土で、3層は若干粘性を帯びた黒褐色土、最下層は粘性が強い黒色土である。遺物は瀬戸・美濃産染付磁器皿の破片（第6図4）が1点出土した。

#### S K006（第5図、図版4）

調査区東側、S D001の中央付近の南側に隣接して位置する。長軸径1.33m、短軸66cmの楕円形を呈する。長軸方位はN-19°-Eである。底面はやや南西側に下方に傾斜している。深さは最深で約50cmである。覆土は、上層はローム粒・ロームブロック、下層は暗褐色土を主体とする。遺物は出土しなかった。

#### S D001（第5図、図版5）

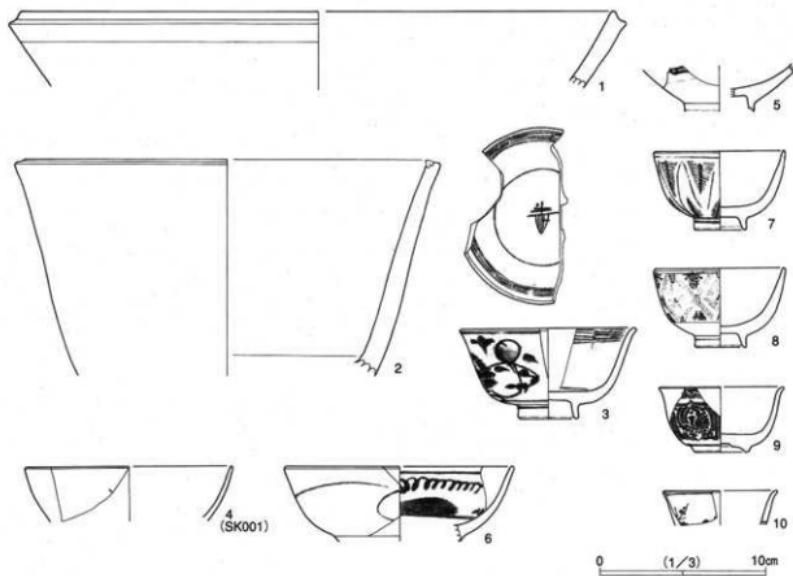
調査区西側で、ほぼ調査区に沿うような方向で検出された直線状に延びる柵列状の溝である。両端は擾乱を受けているが、いずれも擾乱より先には続いておらず、総延長12mほどの溝であったと考えられる。方向はN-83°-Wである。幅は45~90cmで、深さは12~26cmで、断面形は逆台形状を呈する。底面はほぼ平坦で、径13~38cm、深さ11~30cmの柵列状のピットが8か所、1.0~1.6m間隔で検出された。覆土はローム粒・砂粒を含む黒褐色土・暗褐色土が主体である。遺物は土師器の小破片が2点出土した。

### 第3節 出土遺物（第6図、図版6）

遺物は遺構出土のものは少なく、ほとんどが遺構外から検出されたものである。遺構外出土の土器・陶磁器は、調査区西側から瀬戸・美濃産磁器碗類6点、東側から弥生時代後期土器1点、土師器甕5点、中世土器3点、瀬戸・美濃産磁器碗類7点出土した。その他の遺物としては、大正11年鋳造の一錢青銅貨が調査区西側から1点出土した。以下、図示できたものについて記述する。

1は土師質土器擂鉢の口縁部から体部破片で、浅鉢状の器形になると思われるものである。口径約36.0cmを測る。口縁部は断面方形で、口縁端部に凹線が巡る。口縁端部付近はヨコナデ、体部は内外面ともナデが施される。器表面は炭素吸着によって黒色を呈する。胎土色はにぶい赤褐色である。2は瓦質の内耳鍋の口縁部から体部下端の破片である。体部下半や丸味を帯びており、口縁部は直線的に開く。口縁端部は欠損するが、内側に張り出すものと思われる。口径約24.0cmを測る。外面は横方向のナデ、内面は横方向のヘラナデが施される。器表面は炭素吸着により黒色を呈する。胎土色は灰色である。1・2は15世紀代のものである。<sup>1)</sup>

3~10は幕末から明治期の瀬戸・美濃産磁器である。<sup>2・3)</sup> 3は染付端反碗で、口径14.5cm、底径3.35cm、器高5.5cmである。外面の主文様は牡丹文で、内面底部には「寿」銘が記される。19世紀前半のものである。4は染付碗の口縁部から体部の小破片で、S K001から出土したもので、比較的薄手の作りのものである。口径12.5cmである。19世紀後半のものである。5は体部が直線的に開く飯碗で、外面には銅版印刷による染付が施されている。6は染付皿の口縁部から高台部の破片である。口径13.7cmを測る。体部内面には團線で区画された中に簡略化された唐草文が描かれる。19世紀中葉のものである。7・8はほぼ同形態・法量の丸形の銅版染付湯呑碗で、7は調査区西側と東側から出土した破片が接合した。口縁部が所々欠損するほかは完形である。口径7.8cm、底径2.95cm、器高4.8cmである。体部外面の主文様は草文である。8は口縁部が1か所欠損している他は完形で、口径7.75cm、底径2.95cm、器高4.8cmである。体部外面の主文様は寿福菱文である。9・10は端反形の銅版染付小壺である。9は口径7.4cm、底径3.0cm、器高4.0cmを測る。高台部は蛇の目凹形高台で、高台部疊付から底部内面は露胎である。外面の文様は遺



第6図 出土遺物

存部分に鳳凰文がみられる。10は口縁部の小破片で、口径8.8cmを測る。外面の文様は梅文である。7～10は明治20年代以降のものである。

#### 第4節 石造物（第3図、図版5）

第1節で記したように、塚の頂部に1基、南西側の裾部に4基の石造物が造立されていた。これらは、いずれも塚を意識して造立されたものと考えられることから、関係する資料として紹介する。いずれも正面は南西方向に県道側に向いており、ここでは便宜上、頂部の1基に①、裾部の4基に東側から②～⑤の番号を付した。

②～⑤の石造物については、以前は各所に造立されていたものをこの場所に移したとの証言を地元の方から得ており、調査前に造立されていた手前の防火水槽の南東側には、これらの台石とみられる切石が数個置かれていた。なお、現在②～⑤の石造物は調査に先立って、造立されていた位置から約23m南東側の調査区北側の場所に移設された。

① 光背型の石塔である。塔身部は高さ約88cm、幅約31cm、厚さ約19cm、台石は1段で、高さ10cm、幅45cm、厚さ35cmを測る。正面は剥落が著しく、銘文、像容とも失われた部分が多いが、像容は遺存する下部は裳を身に着けた坐像であることから、大日如来像である。遺存する銘文は正面左側に「文化元甲子年 當村」、左側に「□中」と刻まれている。

- ② 自然石型の馬頭観音である。塔身部は高さ約1.2m、幅約54cm、厚さ約25cmを測る。台石は1段で、高さ約16cm、幅約80cm、厚さ約26cmである。塔身部の正面に「馬頭観世音」、背面には「明治三十七年九月二日」と刻まれている。台石の正面、面、右側面には造立者の町村名及び氏名が列記されており、集団で造立したものである。前面は風化しており判読できない部分が多いが、町村名には本郷村、木下町、六合村、大杜村、船穂村、印旛郡須賀、東葛飾郡深井等がみられる。
- ③ 板碑型の石塔である。高さ約60cm、幅約27cm、厚さ約18cmを測る。正面は剥落しており、銘文を判読することができない。右側面には「天保十二 辛丑 二月七日死 五才馬為菩提之」、左側面には「龍腹寺村 施主 五十嵐要像」と刻まれており、馬頭観音であることがわかる。
- ④ 光背型の石塔である。高さ約45cm、幅約24.5cm、厚さ約13.0cmを測る。正面の像容は馬頭観音である。風化が著しく、銘文は判読できない。
- ⑤ 横型の馬頭観音である。高さ約45cm、幅約26cm、厚さ約15cmを測る。正面には「 馬頭観世音 文政十二丑年 三月十六日」、左側面には「海老原善兵工」と刻まれている。

- 注 1 『研究紀要』20 財団法人千葉県文化財センター 2000  
2 『瀬戸市史 陶磁史篇』六 愛知県瀬戸市 1998  
3 『美濃焼』vol.2 多治見市商工課 1997

### 第3章 まとめ

今回の調査は、竜腹寺1号墳の裾部分のみに留まったが、周溝等の古墳に伴う施設が検出されなかったことから、当初想定された古墳ではなく方形の塚であるとの結論を得た。

塚の規模は一辺22mを測り、県内で確認されている方形の塚は一辺5~12mのものが多く、20mを越えるものは数例を数えるのみであり<sup>1)</sup>、比較的大規模な塚であると言える。

築造の目的と年代は、頂上部に祀られた①の石造物を根拠に考えれば、大日如来の像塔は出羽国の大日山信仰に由来する時念仏塔として造立されることから<sup>2)</sup>、出羽三山信仰を契機とする供養塚と解釈され、その造立年である文化元年（1804）が築造年代の下限と考えられる。

出羽三山信仰の供養塚は一般に「三山塚」、下総地方では概して「梵天塚」と呼ぶ場合が多いというが<sup>3)</sup>、地元の方々は竜腹寺1号墳を「大日塚」と呼んでいる<sup>4)</sup>。三山塚は基本的に方形三段の形態を呈するが、今回の調査及び盛土表面の観察では三段に築かれていることを確認することは出来なかった。

次に調査区内から検出された遺構について考えてみたい。SK006を除く5基の土坑は、塚を意識するように南西側裾部の方向に沿うように並んで検出された。覆土はいずれも埋め戻しによるもので、意図的に何らかのものを埋めた土坑と判断される。これらの土坑を出羽三山信仰と結び付けて考えるならば、「梵天納め」という行事に伴うものである可能性がある。梵天納めとは、出羽三山に登拝した新行人がその証しとして与えられる木製の剣梵天（腰梵天）を数多くたまるのを待って供養塚に埋納する行事である<sup>5)</sup>。

柵列状の溝であるSD001は塚の裾部付近で途切れしており、これも塚を意識した施設と考えられる。地元の方の話によれば、調査区東側付近を塚への「参道」と称しており、それに従えば参道の北側を画するための垣もしくは植栽列等の遺構と考えられる。

塚の裾部に造立された②~⑤の馬頭観音については、元来この場所に造立されたものか定かではないが、③は死んだ飼馬の供養のために立てられたものであり、検出された土坑の中で死馬を葬った可能性があるものは、規模から考えるとSK001である。

最後に、竜腹寺1号墳付近の小字名について見てみたい。竜腹寺1号墳が位置する県道から北側は「メ掛」、村道を境としてその東側は「三度山」である。これらの小字名が、出羽三山への登山口の一つが「七五三掛」であることと、羽黒山修験では出羽三山への登拝を「三間三度」<sup>6)</sup>と呼ぶことに関係するすれば、出羽三山信仰に由來した地名として大変興味深い。

注1 『房総考古学ライブラリー8 歴史時代（2）』財团法人千葉県文化財センター 1994

2 『印西町石造物総集編「石との語らい」』印西町教育委員会 1992

3 対馬郁夫「下総地方の出羽三山信仰」「歴史手帖」第8巻5号 名著出版 1980

4 五十嵐行男氏の御教示による。

5 対馬郁夫「市原市の出羽三山信仰に関する研究」「市原地方史研究」第15号 市原市教育委員会 1988

6 宮家 準編『修験道辞典』東京堂出版 1986

# 写 真 図 版



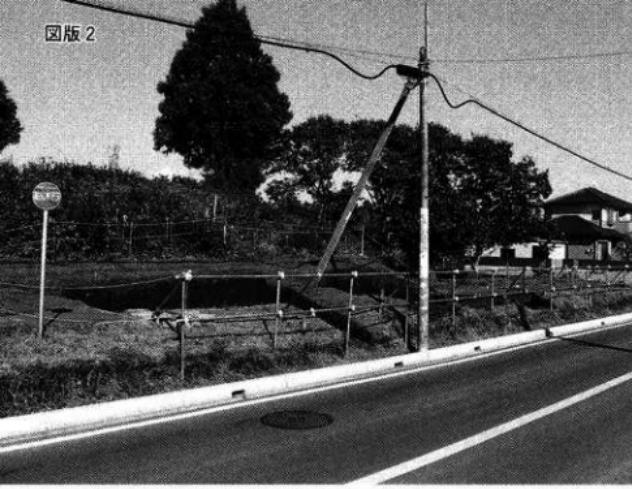
竜腹寺1号墳（南西から）



竜腹寺1号墳（北西から）



竜腹寺1号墳（北東から）



調査区全景（南西から）

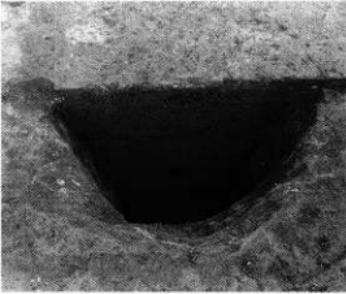


下層確認グリッド土層断面

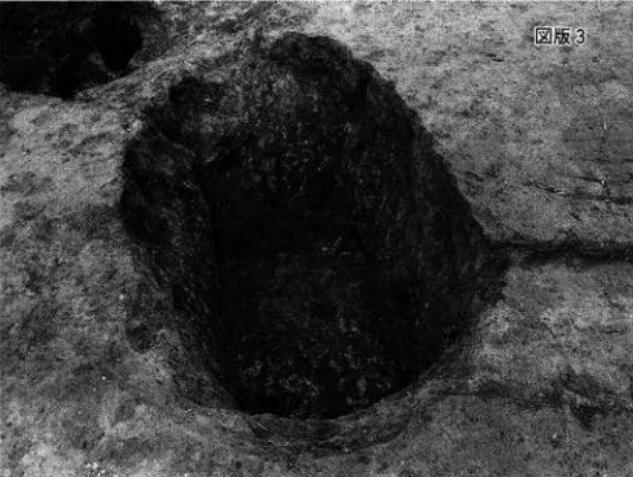


竜腹寺1号墳土層断面





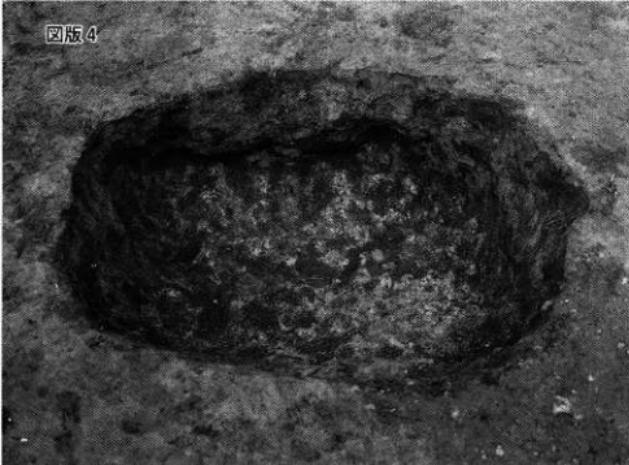
SK001



SK002



SK003



SK004



SK005



SK006



SD001



石造物①



石造物（右から②、③、④、⑤）



土器・陶磁器



錢貨

報告書抄録

ふりがな	さくらいんざいせん (ちほうどうろこうふきん)まいぞうぶんかざいちょうさほうこくしょ 3						
書名	佐倉印西線（地方道路交付金）埋蔵文化財調査報告書 3						
副書名	本塼村竜腹寺 1号墳						
巻次							
シリーズ名	千葉県教育振興財団調査報告						
シリーズ番号	第550集						
編著者名	渡邊高弘						
編集機関	財団法人千葉県教育振興財団						
所在地	〒284-0003 千葉県四街道市鹿渡 809-2 TEL 043-422-8811						
発行年月日	西暦 2006年 3月 24日						
所取遺跡名	所 在 地	コード	北緯	東經	調査期間	調査面積 m <sup>2</sup>	調査原因
印旛郡本塼村 竜腹寺 1号墳	市町村 印旛郡本塼村	遺跡番号 12328 464-1	35度 48分 05秒	140度 11分 22秒	20041001～ 20041029	68	佐倉印西線の 地方道路交付 金事業に伴う 埋蔵文化財調 査
所取遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項		
竜腹寺 1号墳	塚	中・近世	塚 土坑 溝	1基 6基 1条	擂鉢、内耳鍬、瀬戸・美濃磁器	竜腹寺 1号墳は古墳 ではなく、方形の塚 であることが判明し た。	

千葉県教育振興財団調査報告第550集

**佐倉印西線（地方道路交付金）埋蔵文化財調査報告書 3**

- 木埜村竜腹寺 1号墳 -

---

平成18年3月24日発行

編 集 財團法人 千葉県教育振興財団  
発 行 千葉県県土整備部  
千葉市中央区市場町1-1  
財團法人 千葉県教育振興財団  
四街道市鹿渡809-2  
印 刷 株式会社 富士印刷  
千葉市緑区森町3-6-18

---